

るも思ひいでられて、から歌ぞもこゝら去のびうたひつれども得かゝず、されど尼上の齡八十あ
まじなるが、歌をなんいたく好まるれば、たゞに黙すもこしたにて、

外國に類あらめや日れ本の春よさくらの花れ匂ひは

日の本のひかりなるらん得もいと匂ひめてたき山櫻花

吉野よりうつし植ゑにし花の色に君か心のほとそゑらるゝ

雪どいひ又白雲どいふとてもめてこゝろ盡きぬ御園生の花

河内なる片野のみ野にあらねども花の吹雪に道も迷へり

などかたりあひて、日の暮るゝをもえらで松ぞもともして、花の下臥しに夜を明しけり、

かみな月十日第五高等中學校

開校紀念會の歌

園 哲 雄 稿

かしこき御代のはたちまり、

三どせのかみな月にしも

まなびどころの熊本に、

立ちし今日こそ嬉しけれ」

僅に五つ設けられ、

やまどに類多からぬ

まなびどころの熊本に、

立ちしなふこそ嬉しけれ」

富士より高き天皇の、

御蔭によりてうるはしき

まなびどまろの熊本に、

祝へや競へ筑紫人、

まなびどころの熊本に、

立ちし々ふこそうれしけれ」

めぐみを報ひ身を立つる

立ちし々ふこそうれしけれ」

明治廿五年の秋熊本なる高等學校の數

百の人々と薩隅日の三州へ行軍の歌

園 哲 雄 稿

「いかにやいかに荊萱の

又或人は、大君の

薩摩の瀬戸に身は沈む

東路よりし打日さす

つくしのはてに居え君を

心をやりし歌ぞかし

えりて天朝あることを

維新の基たてなんど

身を屠らかし身を沈め

顯しゝ名をいざ行き、

關の戸さゝぬ御代」といひ

爲には何か惜しからん

ども」といひしは鳥がなく

都よりしてわが心

慕ひつゝこし村肝の

そのかみ幕府あることを

えらぬ僻事ヒガ概ツシメみて

たてし操よおのがその

明治の御代の御光に

吊ひ見てんいざ給へ